

中間構文と「総称化」

——認知言語学的方法に寄せて——

三 木 悦 三

英語という個別言語が形づくる表現体系の比較的マイナーな一角を占めるものとして、伝統的には「能動受動態 *activo-passives*」、「擬似受動態 *pseudo-passives*」、あるいは「中間受動態 *medio-passives*」などの名称でつとに知られ、近年では、むしろ、「中間構文 *the middle construction*」と呼ばれることが多い、次のような一群の表現形式が存在する¹⁾：

- (1) Ripe oranges peel easily.
- (2) This cloth doesn't cut to advantage.
- (3) This paper doesn't tear straight.
- (4) The bread doesn't bake well in the oven.
- (5) This cake doesn't break evenly.
- (6) Colloquial language translates badly.
- (7) This dress does up at the back.
- (8) The tent puts up in one's backyard.
- (9) The book sold in New York but not in San Francisco.
- (10) These mosquitoes kill only with a special spray.
- (11) The Smithson microphone records well.
- (12) This manuscript is reading better every day.
- (13) Do you think this material will make up into a nice-looking dress?
- (14) Lake Wanaka and Hawea still continue to fish well despite the recent spells of heavy rain and rising lake levels.

一見して明らかのように、(1)–(14)のいずれにおいても、一般に「人」を動作主体 (agent) とする動詞が述語として生起しているにもかかわらず、主語には「人」ではなく、動詞のあらわす行為がおよぶ対象(「物」)——その多くは「人工物」——がもちいられている。さらに、述部には、総じて難易の程度や適格性ないしは達成度に言及する様態副詞を中心として、何らかの副詞的要素 (adjunct) をともなうのが通例であること、加えて、いずれの文も主語の指示する対象に本来的 (inherent) に具わると考えられる「属性」もしくは「性質」をあらわしていること²⁾、これらの点に容易に気づかれるであろう。

本稿の目的は、中間構文がもっぱら主語の「属性」をあらわす所以をFagan (1988) の謂う「総称化 genericization³⁾」を継承的に発展させつつ詳細に論じるとともに、併せて、わたしたちのいわゆる「認知」「知覚」のありようが現与の生活実践とも不可分に形成されている事実の一端にも論及し、認知言語学的なアプローチに若干の論評を加えることに在る。

1 吉村 (2001) と「共特定化」

中間構文は主語名詞句 (NP) の指示対象に内在的に具わる「属性」をあらわす表現形式である——吉村氏 (2001) もまた、この周知の事実可依拠して議論を起こしておられる。氏としては、中間構文の特異性、すなわち、「人」を動作主とするのが通常である動詞が述語にくるのに、「物 (人工物)」を主語にした表現形式をとること、を説明されるべき論点と見定めた上で、昨今の認知言語学の見地をも踏まえつつ、これを「共特定化 cospecification」と称される現象の一環として捉えるのである。氏の言う「共特定化」とは、たとえば、(15)の文において、

(15) Booksellers usually prefer cookbooks to textbooks
around Christmas.

述語動詞 prefer の意味が、主語 NP booksellers によって喚起される通念的な知識(「世間知」)が作用因となって、「(本を読むことを)好む」ではなく「(商品として本を売ることがを)好む」のように解釈される現象を指し、一般にこのように主語NPの喚起する「クオリア役割 qualia role⁴⁾」と相

俟って後続の述語動詞の解釈が「特定化 specify」される現象——「名詞のクオリア役割によって動詞の多義性が解消される現象」(p.290)——を氏は Pustejovsky (1981) に倣って「共特定化」と呼ぶ。この「共特定化」の作用によって、中間構文の場合には、謂うところの「属性の前景化」が引き起こされ、その結果、中間構文はもっぱら主語 NP の「属性」を記述した文として意味解釈される⁵⁾。たとえば、(16) のような文では、

(16) The car drives well.

「共特定化」の過程を経ることによって、主語 ‘the car’ の有する内在的な属性 (‘drive well’) が「図 figure」として意味解釈の上で「前景化」される。そして、これとも表裏一体的に、述語動詞 drive の本来的な動作主体 (‘人’) は「地 ground」となって「背景化」(＝後景化) し、かくして、中間構文では主語の属性があらわされる、云々。このように氏は了解され、「共特定化⁶⁾」を主軸とした自論を展開されるのであるが、問題は、しかし、このように「クオリア役割」、なかんずく、「目的的クオリア⁷⁾」と称されるものが前景化し、他方において、述語動詞の動作主体が背景化するということが一体なぜ起こるのかという点に係る。氏のように、主語NPによって喚起(想起)される「クオリア役割(知識)」が述語動詞によって「特定化」される旨を指摘し、これによって主語の属性が顕在化して当の文は属性文として解釈されるに至ると説くのみでは、(16) のような中間構文はもとより、同じような主語 NP と述語動詞が同一節の中に共起する、たとえば、‘The car can be driven well.’ のような受身文もまた、「共特定化」の作用によって、属性をあらわす文として解釈されることになるのではないか。しかし、それは必ずしも事実に合致しない。

この論評にたいしては、しかしながら、氏の次の一節が批判への回答として提示されるかも知れない：

- (17) 受動文では、属性読みを喚起する元となっている主語名詞句の疑似動作主性が問題にならない。これは、上記の受動文 [= ‘French was acquired easily (by John).’] では John ないしは総称的動作主が真の動作主として喚起されるからで、それを打ち消すための属性の前景化(もの)が動作の担い手)が必要ない。換言すれば、ものの「属性」を前景化して表現するためには、真の動作主 (by NP) を

積極的に打ち消す必要がある。中間構文の概念的成立の根拠はまさにこの点にある。すなわち、真の動作主が存在しないという話し手の信念世界の中でしか、ものの自動性あるいは属性の自己発現は描けないのである。(pp.304 - 305)

氏の説くところにしたがえば、「属性の前景化」は「真の動作主」が喚起されることのないよう、これを「打ち消す」働きをもつ。受身文では「真の動作主」である by NP が現に存在もしくは潜在するのであるから「属性の前景化」、つまり、「共特定化」、ということはそもそも問題とはならない。しかし、中間構文のように「属性」を前景化して表現する「ためには——氏の別のことばで言い換えれば、「中間構文の概念的成立の根拠」を得るためには——まさしく「真の動作主 (by NP) を積極的に打ち消す」〔下線部は原文のまま〕ことが不可避となるのである、云々。しかし、もし、氏の論じるように中間構文の成立が「真の動作主」を打ち消すことに懸かっているとすれば、中間構文の本質を究明する所以は、「共特定化」ということではなく、「真の動作主」を打ち消すこと、すなわち、本来の動作主体である「人」が背景化すること、そしてこれと一体的に「属性」が前景化されて主語 NP がいまや「疑似動作主」として機能する、このゲシュタルト的な転換のメカニズムを解明することにこそ求められるべきなのではないか。氏の唱える「共特定化」は属性の前景化を説くという点では、なるほど、中間構文の特徴の一斑を捉えうものではあっても、述語動詞の本来的な動作主が背景化する局面を等閑に付す点で、問題の核心を突くものではないと言わなければならない。

氏は、繰り返し、中間構文においては「共特定化が促進される」旨を指摘される。たとえば、次のような文に関して、

- (18) They (=tyres) handle better, they brake better, they grip better.

「タイヤについて知りうる百科事典的情報 (クオリア役割) が、動詞との共特定化を促進する知識的動機づけとして働いている」(p.293) 云々と付言し、また別の箇所では、(19) の文について、

- (19) This music dances better than the other one.

「ここで前景化されているのは、音楽に関わるある種の特性である。すなわち、音楽の持つ「リズム」や「メロディー」「テンポ」などが喚起されており、それが dance で表される行為との共特定化を促す」(p.300)とも述べておられる。しかしながら、この「共特定化の促進」がいかなるメカニズムによって引き起こされるのか、この機構がつまびらかに説かれないかぎり、その所論は、つまるところ、中間構文は属性をあらわす——別言すれば、中間構文では属性が前景化する——という周知の前提的理解に合わせた議論であり、真に説明されるべき論点、すなわち、通例は動作主体としての「人」を主語に必要とする動詞が、なぜ中間構文では、「人」ではなく、「物（人工物）」を主語とするというような表現形式を採るのか、この肝腎なポイントを回避した議論であると批評されてもやむを得ないであろう。

翻って考えてみるに、「共特定化」と称される過程は、殊更に中間構文にかぎらず、文の意味解釈一般に際して広汎に働いているものと思われる。氏みずからも指摘されるように、「共特定化」の作用は文のレベルを超えた談話的文脈、あるいは、わたしたちの共有する語用論的知識にも依存している。しかし、こうした「共特定化」がつねに「属性の前景化」と見なしうるかどうか、この点は熟考を要する。「動詞の多義性の解消」と相即して、名詞の「クオリア役割」もまた動詞のあらわす意味に適合するように次第に絞り込まれる過程——この「共特定化」の過程は、たしかに、動詞のあらわす特定の意味が焦点化（focalize）されるとともに、他方、潜在的に可能な別の意味が排除されるという点では、一種の「前景化」と言えるであろうけれども、当の文を属性文、すなわち、いわゆる「中間構文」として成立させるに足る「属性の前景化」がこの「共特定化」によってつねに達成されるわけではあるまい。先の受身文もそうであるが、a car と drive、あるいは scissors と cut の間に見られるような「共特定化」——つまりは、共起する語彙をわたしたちの通念とも調和的に統合するような意味解釈——は、文のレベルであれ、談話的レベルであれ、およそ文の適切（felicitous）な解釈には必須の過程であり、とくに中間構文に限定される特徴的な現象ではない、このことは少しく省察をもちいれば自明であると思われる。氏の言う「共特定化の促進」が一体どのようなメカニズムに負うて行なわれるのか、ことばを換えて述べれば、「属性の前景化」なるものがいかにして十全に成就されるのか、中間構文の要諦を成すこの論点が氏の所説では一向に明らかにされないままなのである。

2 属性と「総称化」

管見では、「共特定化」が起こり、「属性の前景化」が行なわれるのは、述語動詞のあらわす行為の担い手である本来的な動作主体 (agent) が知覚・認知の上で「非関与的 irrelevant」となって背景化すること、この点に係わる。では、なぜ、このように動作主体が非関与的となり「背景化」するようなゲシュタルト的な知覚・認知の変換が起こるのか。いまやこれが議論の争点となる。そして、これには中間構文の述語動詞はどの特定の誰某によって行なわれる行為をあらわすのでもないという事情が決定的に係わりをもつ。

次のような中間構文の事例を念頭に置きながら、以下、この点の討議をすすめることにしよう：

- (20) The car handles smoothly.
- (21) These red sports models do sell, don't they?
- (22) The boomerang throws well.
- (23) The basketballs dribble poorly.
- (24) This straw sucks well.⁸⁾
- (25) This briefcase carries neatly under your arm.

(20)－(25)に見るように、中間構文は主語NPの指示する対象(人工物)にたいして行なわれる動作が特定の誰かれによって為されることを言いあらわす文ではなく、誰とは特定しがたいけれども、ともかく誰であれ不特定の動作主によって当の動作(行為)が主語にたいして行なわれることをあらわす文である。ところで、このとき、主語に人工物がもちいられる場合に最も顕著であるように、主語 NP の指示対象に加えられる(働きかけられる)行為は当の対象に関してあらかじめ意図されている種類の行為であり、誰であれ不特定の動作主体が一定の手順にしたがって意図された所定の様式で主語の指示対象に働きかけること、このことが中間構文ではもっぱらあらわされる所以となる。この意味において、ここには Fagan (1988) が炯眼にも指摘し、不十分ながらも論じる「総称化 genericization」の過程が作用していることが窺知されよう⁹⁾。

わたしたちは、もとより、物理的にはたがいに相違する個別的な存在(＝個人)であるけれども、このように、ともあれ所定の手順(＝行動様式)にしたがってその埒内で行動するかぎりにおいて、わたしたちは個々別異の単

なる一個人 (individual) という次元を超えてたがいに「同型的 isomorphic」と見なしうる存在ともなっている、この厳実が銘記されなければならない。もう少し議論に具体性をもたせるために、いま、たとえば、わたしたちが椅子を取り扱う場合を考えてみよう。いわゆる椅子をわたしたちが「椅子」として取り扱うということは、とりもなおさず、当の椅子にたいしてしかるべき所定の様式にしたがって働きかけることであると言えよう。そして、このように対象が取り扱われるかぎり、当の対象（椅子）もまたわたしたちにとって生活実践的に「椅子」として機能するところとなる。こうして、単なるみかん箱がまた「椅子」ともなるのである。対象の有する外観や形状、あるいは対象を形造る素材というような、主としてわたしたちの視覚・触覚に係わる特徴もさることながら、実践的に「椅子」としてのわたしたちの対象同定を決定づけるものは、対象（椅子）にたいする一定の働きかけ方、その物の取り扱い方にほかなるまい¹⁰⁾。外観・形状・素材などという、謂うところの「クオリア役割」、とりわけ、「構成的クオリア」「形式的クオリア」なるものは、椅子としての実際の・道具的な機能（「目的的クオリア」）がより効果的に、かつ効率的よく、果たされうよう、加えては、この機能の遂行に支障をきたさない範囲において、選好もしくは採択される／されたものと見るべきであろう。

問題の要訣を成すのは、わたしたちが椅子という対象（人工物）をこのように「椅子」として取り扱うとき、当の対象にたいして誰しもが一様に反応・行動するというまさしくこの一点において、わたしたちは個々人として有する身体的・生理的な相違を超えて、ひとしく、単なる物理的・個別的な一個体以上の存在、すなわち、相互に「同型的」「同質的」な局面をもつと見なしうる者、となまっているという前述の事実である。この次元における「同型者」としてのわたしたちをいま差し当たって「ひと one」と呼称することにしよう。「ひと」とは、「ひと前」「ひと目」「ひと当たり」「ひと間違い」の「ひと」とも同じあの「ひと」である。それは老・若・男・女いずれの個人でありつつも、さりとてしかし、いずれともまた特定しがたい対象である。この点は敢えて多言をもちいるまでもなく了解されるところではないかと思われる。

わたしたちは、生まれ落ちてこのかた、言語的交通を中心とする対人的な日常実践を不断に繰り返すことによってたがいに「同型化」し、多かれ少なかれ、同じように対象を知覚・認知し、同じように事態を把握する者（＝「ひと」）として形成される。対人的な応接の基幹を成す「対話」そのもの

が「話し手」-「聞き手」という一種の「役割 role」を交互に演じることに
おいて成り立つのであり、当事者の間にこのような一定度の「同型性」がな
ければ対話は円滑に行なわれえない。かくして、わたしたちの生存そのこと
が相応に円滑な対人的・対話的応接に懸かっている次第なのである。いわゆ
る「社会化 socialization」の過程をとおして、わたしたちは個体として
個々に相違する物理的・生理的な次元とは端的に異なる次元において「ひ
と」として形成される所以となり、そしてこの次元において始めて、わたし
たちの現に行なう「意味理解」、すなわち、「現実理解」、もまたこれを成就
することが可能となる。謂うところの「現実世界」とは、このようにして形
成され、かつ維持されるものにほかならず、「意味」とは、本来的に、共同
体的な他者との生活実践において——そして、他者とのこの関係においての
み——存在すると言わなければならない。卑近な例をもちいてこの間の消息
の一斑をしめすならば、たとえば、梅干しの「すっぱさ」は、なるほど、特
定の個人誰かれの生理的な知覚（感覚）とすることができであろうけれど
も、梅干しにたいするわたしたちのこの反応には、そうした反応の仕方
（態勢）が同じ生活形態を実践する他の人々にも「共有」されているという
信憑（確信）をとまなうのが通常である。そして、この信憑——すなわち、
「ひと」としての信憑——に支えられて、「酸っぱい」という言語記号が言
語記号としての機能を能く果たしうるところとなるのである。そもそも、わ
たしたちが何をどのように知覚・認知する／しないということ自体が、後論
のように、生得的・生来的に具わる知覚・認知の性向による以上のものなの
であり、わたしたちの行なうゲシュタルト的な知覚・認知、したがってまた、
現実世界の分節（segmentation）の仕方、は他者たる人々の関心の向け方、
煎じつめれば、共同体的な生活形態・生活実践のありよう、これに決定的に
左右されている。

加えてさらに、たとえば、「踊る」という行為は、誰であれ「ひと」が一
定の所作を一定の様態において行なうことを謂うのであり、おおむね、この
所定の範囲の動作を甚だしく逸脱しないかぎり、個人々の具体的な動作は
etic な観点からはさまざまに変異するにもせよ、emic な見地においてはそ
れらはひとしく「踊る」動作として一様にわたしたちには認知・同定される。
およそ意味概念、したがって、言語記号なるものは、この次元、すなわち、
「ひと」の位相、において成立する。そして、このように意味概念が「ひ
と」との関係において形成・規定されるものである以上、それは生活・文化
的な関心（＝生の関心）のありように拘束されたものともなっているのであ

る。言語記号がこのような様式で成立する事情に負うて、「範疇化 categorization」ということが行なわれうるところとなり、わたしたちを取り巻く四囲の現相を分節化して、これに秩序（order）を与える——換言すれば、四囲の現相をわたしたちにとって「理解」の可能なものとする——ことが相叶うのである。

こうして、言語は共同体的な「ひと」の位相においてようやくその機能を遂行することが可能となる。いわゆる「理想的な話し手—聞き手 the idealized speaker-listener/hearer」なるものは、わたしたちの見地からは、この共同体的に形成される理念化＝理想化された「ひと」を謂うものにほかならない。

3 中間構文と「属性化」

さて、一般に「属性」と称されるものは、わたしたちと対象との実践的な関係においてこれを規定することができる。たとえば、「太郎はやさしい」とわたしたちが言う場合、それは太郎という人物がどの特定の人になりたいして「やさしい」というのでもなく、誰であれ一般的に「ひと」になりたいして一定の安定した状態（＝「やさしい」）を太郎が呈するということであろう。前節で論じたところでもあるが、「やさしい」という語それ自体が、そもそも、誰であれ「ひと（x）」が「ひと（y）」にたいして一定埒内の振る舞い方をすることをあらわす点において、言語記号として成立しているのである。いま仮に、「やさしい」という言語記号が意味するところを $x \text{ BE KIND (TO } y)$ と表記すれば、この変項（variable） x を「太郎」という特定値（value）によって充当することが、すなわち、太郎という対象を「やさしい」状相に在るものとして記述（describe）することである。したがって、「太郎はやさしい」という言明は、すでに「太郎」として同定（identify）されている対象（＝主語）に関して、当の対象をさらに単なるそれ以上の状相（＝述語）において知覚・認知することであると言えよう。このとき、太郎の呈する当の状態は、太郎が単なる一個体以上の同型的な「ひと」として処遇されていることに負うて、「太郎」という特定個人に限局された一状態としてではなく、誰であれ「ひと（x）」一般に関して妥当する一状相（「やさしい」）としてわたしたちに認知・同定される。そして、当の太郎の呈する状態は対人的にどの特定個人にたいして差し向けられているわけでもない

いう理解とともに、「ひと(y)」という局面(TO y)は「非関与的」となってわたしたちの関心の埒外に置かれ、知覚・認知の上で背景化する。これとも表裏一体的に、当の、元来は対人的な、一定の反応的状态(「やさしい」)がいまや対象たる太郎に「恒常的」に知覚・認知されうるものとして——ことばを換えれば、時間的・場所的な制約を超えて、誰であれ「ひと」一般に知覚・認知される状態として——太郎自身に帰属せしめられ、あたかも太郎に内在的・本質的に具わる「性質」と見なされるにおよぶ¹¹⁾。これが謂うところの「属性の前景化」である。

中間構文のあらわす主語(対象)の「属性」もまた、元来、対象にたいする実践的な関係において認められる一定の反応的状态であり、この場合にも、個々の応接に携わる行為者(=動作主体)は、それが誰であれ、「ひと」として一般化=普遍化(generalize)されている。視角を変えて述べれば、たとえば、

- (26) That pogo stick jumps well.
- (27) Datsuns sell quicker than Toyotas.
- (28) Those tiles lay better if you wet them first.
- (29) That joke tells well, doesn't it?
- (30) Your new oven will clean in minutes!
- (31) That shape of box doesn't wrap up very easily.
- (32) These Mills and Boon novels lend rather rapidly.

(26)－(32)の文例からも推察されるように、あらかじめ意図された所定の様式にしたがって対象('a pogo stick')との応接を行なうことと相即的に、一定の状態ないしは様態('jump well')が「図」となってわたしたちに顕在化する。しかも、この安定的な状態あるいは様態は、わたしたちが対象にたいして所定の様式で動作を行なう者であるかぎり、動作を行なうのが誰であるかにはかわりなく、多かれ少なかれ一様に、すなわち、ほぼ必然的に、わたしたちに知覚・認知される。このゆえに、動作を行なう主体(=「ひと」)は当座は「非関与的」と見なされて意識の埒外に背景化(=「地」化)し、他方、これとは表裏の関係において、当の一定状態ないし様態は対象の「本質」(=性能)に由来するものと感じられて対象自体に内在化(=属性化)されるのである¹²⁾。

中間構文では、主語の指示する対象の呈する一状態は動作主による所定の

行為（‘jump’）を媒介項として始めて成立するに至る状態である。一般に「属性」なるものは、誰であれわたしたちが対象（人工物）にたいして所期された応接を行なう——言い換えれば、当の対象を単なる物以上の「人工物」としてしかるべく取り扱う——対象とのこの関係においてのみ、そしてこの実践的な態勢と一体的に、わたしたちに知覚・認知される所以となるのであるが、中間構文ではこの性状の知覚・認知のありようが顕示的かつ意図的に言語化されている。この意味で、中間構文の述語動詞は後論の感覚動詞にも相つうじる一種の知覚動詞としての機能を帯びていると見ることができよう¹³⁾。中間構文が主語（「物」）の属性をあらわすにもかかわらず、述語動詞としては、通常、「人」を動作主（＝行為者）とする動詞をとまなうのは、当の属性の知覚・認知そのものが対象（「物」）をそれとしてしかるべく処遇するわたしたちの実践的な反応態勢とも不可分になっているからである、このように結論することがゆるされるのではないかと思う。

以下、この結論を踏まえて、若干の具体例を少しく立ち入って吟味してみよう：

(33) *The door kicks easily.

(34) *The ball hits easily.

(33) (34) のような文の容認度は、「ドア」あるいは「ボール」をわたしたちが日常生活でどのように取り扱うのが常態であるかという通念的な理解と密接に関係している。たとえば、(34) は、ある特定のボールが誰にとっても「打ちやすい」性質を具えていることを表わそうとする文であると考えられるが、およそ人という人にボールが「打ちやすい」対象として知覚・認知される、そのようなボールの使い方を現実の生活実践のなかに同定（identify）するのがむずかしいことがこの文の容認度の低さの原因であるように思われる。視角を変えて述べれば、(34) が「有意味」に解釈されるためには、ボールに対する一定の働きかけ方（＝打ち方）が共同社会的に確立され、かつ、そもそも「ボールを打つ」という行為が所定の目的的な行動として慣行化していることが不可欠なのである。一定の様式にしたがって所定の目的のためにボールを打つという行為が慣習的に確立し、そしてまた、ボールそれ自体にも目的に合わせて一定の基準（規格）が課されるという慣行が成立して始めて、誰であれ「ひと」が「打つ」という働きかけを行なうことに即応してボールに知覚・認知される反応的状態にわたしたちが関心を向けると

いうことが可能となるのである。(34)の容認度が低いのは、そうした慣習的な行動——規範化された行動作法——が現実に確立していないことによるものと推察される。吉村(2001)でも指摘されているが、

(35) These baseballs hit like a dream.

のような文が容認可能であるのは、(35)の場合には、「野球」というゲーム(=行動形態)が言及されているわけであり、所定の用具(バット)を所定の様式でもちい、さらに、所定の形状・材質の「ボール」を所定の手順を踏んで「打つ」ことがわたしたちに想起される。(35)の表わすところは、したがって、誰であれ「ひと」がこのような所定の行動作法にのっとって対象(baseball)に働きかけ(hitting)を行なうかぎり、誰がそれを行なうかには係わりなく、定常的な‘like a dream’という反応的状态(「手応え」)が対象に知覚・認知されるということであり、これは「野球」という行動形態のなかで使用される「ボール」(baseball)の本質的属性(「品質」)を表わすものと意味解釈される。

では、次の容認度の差異はどうであるか：

(36) This car sells well/easily.

(37) *This car buys well/easily.

(36)のsellの場合には、「(商品として買い手に)物を売る」という慣習的な行為(働きかけ)が主語(this car)にたいして行なわれ、これにたいする反応として「(買い手が合意して)買い取る」もしくは「手に入れる」という所定の事態を想定することができる。そして、副詞well/easilyは、この「(買い手が合意して)買う」という部分を修飾すると解釈されよう。これを要するに、(36)では、誰であれ、共同体的に確立した「(商品を)売る」という行動形態にしたがって対象(car)に働きかけるかぎり、誰が「売る」行為を行なうかといったこととは無関係に、買い手が当の物(car)を「買い取る」という反応的事態が必然的かつ「容易」に成立することがあらわされる所以となる。この事態認知と相即して、そうした事態を引き起こす原因が主語(car)に具わっているかのように見なされ、これが主語の「性質(品質)」として了解されることはすでに繰り返し述べたとおりである。一方、これにたいして(37)の場合には、通念にしたがって理解

するかぎり、主語（商品）にたいして「買う」（buying）という働きかけを行なうことに即応して生じる一定の反応的事態を想定することが極めて困難である。商品にたいする買い手の「買う」という働きかけは「（合意して）買い取る」「手に入れる」ことと、事実上、一体的であり、「買う」という行為にたいして反応的に知覚・認知される一定の事態を同定しにくいという事情が認められるのである。恐らくや、このことが（37）のように「（物を）買う」といった行為を中間構文という表現形式であらわすことを困難にしている主因ではないかと付度される¹⁴⁾。ともあれ、事の眼目は、中間構文であるかぎり、そこには「ひと」の働きかけが看取されるという点であり、そして、この「総称的」な「ひと」が背景化し、これとは表裏の関係で、反応的状态（事態）が前景化されて対象（主語）に帰属されるという件の論点である。

いわゆる「認知」にはわたしたちが現に行なう生活的実践が分かちがたく係わっているのであり、「認知」はつねに実践的な契機を孕んでいる。わたしたちが共同体的な実践者（＝「ひと」）であることに負うて始めて、わたしたちの現与の「認知」もまた可能となるのである。謂うところの「共特定化の促進」——すなわち、「属性の前景化」——の過程とは、前節来、長々と述べてきたように、対象にたいする所定の働きかけにおいて一定の状態（様態）が不変的に認知されること、換言すれば、誰であれ「ひと」として対象に所定の働きかけを行なうことにおいて、当の対象が一定の状態（様態）をつねに呈すること——この事態を言いあらわそうとするものであろう。ここに「総称化」の過程が不可避免的に関与していることはいまや明白であると思われる¹⁵⁾。対象の有するさまざまな属性（状態）を同定・記述するためには、なるほど、それらの属性を知覚あるいは認知することが不可欠であるにしても、当の属性の知覚・認知なるものが、遡って、そもそも対象の知覚・認知ということが、わたしたちの生活形態・行動形態の在り方、約言するならば、わたしたちの「ひと」としての共同体的な形成、と相即不離の関係を成す次第なのである。

4 「感覚動詞＋補語」構文

わたしたちの身体に具わる五感と称される感覚機能もまた、わたしたちの日常実践を基礎にして、身体の部位もしくは五体それ自体が「視覚」「聴

覚」「味覚」「嗅覚」「触覚」のそれぞれの機能（属性）を有すると了解されるに至ったものと思われる。わたしたちが行なう「見る」「聞く」「味わう」「臭う」「触れる」という所作——これらはいずれも言語化され、概念化されているかぎりにおいて、共同体的に「有意味」（＝「関与的」）な行為と考えることができるが、これらの所作はまた、わたしたちの身体的な構造からしても、四囲の環境とわたしたちが応接を行なうに際してその媒介項とならざるをえない所作であると言えよう。

前節の議論との脈絡で述べれば、「味わう」という所作の成立は、誰であれ、一定埒内の行為を一定の様態で行なうことと不可分であり、同じように、誰であるにせよ、ともかくも一定の所作としかるべき様態を介することにおいて「見る」という行為が、あるいはまた、誰にせよ不特定の主体がしかるべき所作と様態とを踏むことによって「聞く」という行為が、それぞれ成立する所以となる¹⁶⁾。いずれの場合にも、行為の主体は特定の誰某という単なる一個人を超えて一般的な「ひと」として了解されていることが知られよう。

さて、「見る」「聞く」「味わう」「臭う」「触れる」といった所作そのものがわたしたちにとって主たる関心であるような対象との応接において、当の対象が概ね安定的で一定した状態を呈する（ようもくろまれている）ケースも、後述のように、現にわたしたちの身边には少なからず見出しされる。しかし一般には、これらの所作による働きかけにたいしては一義的な反応（状態）は必ずしも予期されていないのが常態であろう。したがって、「感覚動詞＋補語」構文では、中間構文の場合のように、つねに対象の内在的・本質的な属性（性能）があらわされるわけではない。とは言え、しかし、言語表現の形式が成立するメカニズムという観点からは、「感覚動詞＋補語」構文は中間構文ともパラレルな関係にあると見ることができる：

(38) The fish smells all right.

(39) You sound angry.¹⁷⁾

(40) Her forehead feels feverish.

(41) You look quite exhausted.

(42) This fruit tastes bitter.

先述のように、「見る」「聞く」「触れる」「味わう」「臭う」という所作はおのおのが言語化＝概念化されているかぎりにおいて、いずれも、誰であれわ

たしたちが「ひと」として一定の様式で対象に働きかけることを謂うものとなっているのであるが、「感覚動詞＋補語」構文では、まさしく対象とのこのような所定の応接を介して、そしてこの応接と一体的に、わたしたちに知覚・認知される一状態（様態）が補語としてあらわされていると考えられるのである。対象（‘fruit’）への働きかけ（‘taste’）が「ひと」としての一定の様式で行なわれるゆえに、行為主体たる一般的な「ひと」は関心の埒外に置かれて背景化し、他方、これとは裏腹に、対象との一定の応接において知覚・認知される状態（‘bitter’）が前景化される。（38）－（42）のような表現は、わたしたちが身体的・生理的な感覚の機構を「ひと」として共有していることを前提として成立する言語形式（＝認知・判断形式）であり、この意味において、なるほど、個々の場合にあらわされる特定状態の知覚・認知は行為主体＝感覚主体¹⁸⁾たる個々人に帰属するものに相違ないけれども、当の知覚・認知のありようはわたしたちが「ひと」として五感それぞれを「同型的」に働かせるよう形成されている原事実に負っている、このことが看過されてはならない。たとえば、

（43） ‘He sounds tired.’

という個別的な判断は、たしかにこの文の発話者一個人に帰属する判断であると言えるが、しかし、中間構文の場合に主語NP（人工物）に関する所定の取り扱い方（働きかけ方）がわたしたちに共有されているのとも類比的に、わたしたちが「疲れた tired」状態にあるとき、それを「ひと」は一般にどのように「聞く」のか——もう少し具体的に言えば、わたしたちの発声・調音の仕方、声の音色・音質、発話の形態がそうした場合にどのような状態を呈するのか——これを「聞き分ける」知覚・認知の態勢（構え）がわたしたち相互に共有されていることを必須の前提として、（43）の意味するところは理解可能となる底のものである。角度を変えて述べれば、そのような「聞き分け」をとおして、わたしたちは他者の発声、発言の仕方に「疲れた」という一状態（状相）を知覚・認知することができるのであり、そして、この「聞き分け」の態勢が、多かれ少なかれ、すでに一定度、わたしたちに共有されている次第なのである。蛇足ながら、この関連で付足すれば、‘He smells tired.’ のような発言が十全に意味理解されるためには、嗅覚的に、一定の「嗅ぎ分け」の仕方が当事者双方に形成されていることが前提として要請されるであろう。

このように了解して大過ないものとするならば、「見る」「聞く」とは、ただに四囲からの刺激を目ないし耳を介して漫然と受容するの謂いではなく、わたしたちの所作がいわゆる「見る」あるいは「聞く」行為として自他にとって「有意味」に成立するためには、いわば、「(人として) 見るべきものを見るべくして見る」「(人として) 聞くべきものを聞くべくして聞く」とでも言いあらわしうる知覚・認知の態勢が言語共同体的に形成かつ共有されていることが不可欠となる。そして、すでに容易に窺知されうるところと思われるが、このような知覚・認知の態勢の形成は共同体的な「関心の向け方」、つまりは、生活実践のありようとも不可分である、この点もまた諒察されるのではないかと思う。

ところで、知覚・認知される状相が対象に固有の「内在的 inherent」「本質的 essential」な属性(性質)と見なされるか、それとも「一時的 temporary」「偶有的 accidental」な属性(状態)と見なされるか、これは対象にたいするわたしたちの応接のスタンスに深く係わっている。中間構文の場合のように、概して、特定の用途のために製作された対象(人工物)をその用途のために道具的・手段的にもちいる場合には、その際に知覚・認知される反応的状態(様態)は、わたしたちが当の物を所定の使い方にしたがってもちいている以上、対象に固有の「本質的」な性質(=性能)と見なされるのが通例である。これにたいして、「感覚動詞+補語」構文では、「見る」「聞く」「触れる」「味わう」「臭う」という所作が対象にたいしてあらかじめ意図された所定の行為であり、対象との関係がもっぱらこれらの行為を介した応接に限定される場合、したがって、対象が特定の目的のために道具的・手段的に扱われるような場合——むろん、そのような、たとえば、「見てくれ」だけがわたしたちの主たる関心となる場合も少なくないし、また、「食べ物」を対象とするような場合には、「食する」ことに加えて、俄然、「味わう」ということが一大関心事となる——を除いては、知覚・認知される状態は必ずしもそのように対象に内在的・本質的な属性(=性質)とは見なされないのが一般であろう。要言するに、ある状態が対象に「本質的」と判断されるか、あるいは「偶有的」と判断されるか、これを決定するのは当の一状態の知覚・認知が、特定の誰某にたいしてではなく、「ひと」一般にたいして妥当するか否かという点である。先の人工物の場合に知覚・認知される一状態が対象(人工物)に内在する「本質」と見なされたのも、結局、対象を「人工物」として所定の仕方では取り扱うかぎり、当の状態が誰であれ「ひと」一般に一樣に知覚・認知されうるものだからであり、「ひと」一般

への妥当ということがこの場合にも判断の拠りどころとなっている。

以上に述べた点は、しかし、感覚動詞を随伴するケースばかりではなく、ひろく性状一般をあらわす、たとえば、

(44) Mary is *beautiful*.

(45) The doctor is {*intelligent/tall/beady-eyed*}.

(46) Kimberly is *tired*.

(47) The doctor is {*available/drunken/sick*}.

のようなケースにも当てはまる。(44)–(47)のあらわす属性が対象に「本質的」ないしは「個体レベル individual-level」と解釈されるか、それとも「一時的」もしくは「事態レベル stage-level」と解釈されるかは、いつに、それぞれの状態が「ひと」一般にたいして普遍的に妥当するか否かに懸かっている。「本質的」とは、しかじかの状態が当の対象に「恒久不変的 permanent」に具わるの謂いであろう。そして、「恒久不変的」とは、時間的・空間的な制約を超えて遍在する (omnipresent) こと、すなわち、個別的・特定の誰かれの個人を超えた次元に成立する「ひと」に妥当するの謂いにほかなるまい¹⁹⁾。もちろん、

(48) She's all *beautiful* in her new dress! Mama, just look at her!

(49) Mary got all *beautiful* for the party.

のように、当の状態 ('beautiful') が「一時的」と解釈されるケースも可能ではある²⁰⁾が、「美しい」が「本質的」な性状と判断されるかぎり、その判断は単に特定の知覚主体 (= 経験者) にとってのみならず、誰であれ「ひと」に妥当する判断となっていることが容易に認められよう。これとは対照的に、「疲れた tired」ように「一時的」な属性と解釈されるのが通常である性状の場合には、上述の論点が妥当しないこと、これまたすでにして明らかであろう。

わたしたちは「ひと」の位相に自己形成を遂げ、やがて言語・文化共同体のれっきとした成員となる。言語的交通をふくむ他者との日常的な実践にたずさわるとき、わたしたちは「虚焦点 focus imaginarius²¹⁾」とも言うべき「ひと」の位相にひとしく同調しているのである。そして、個々人が同型

性を有する「ひと」としてたがいにしかるべく応接することによって「協調 cooperation」ということがそもそも可能となるのであり、また、協調的・協働的な相互の応接が行なわれているかぎりにおいて、当事者は一定度、たがいに同型化されている。中間構文の場合に最も典型的に見られるように、対象（人工物）をそれがあらかじめ意図されたところのものとして認知するというのは、まさしくわたしたちの生活実践のあり方、すなわち、生活関心のあり方、に即応して対象を処遇することにもほかならず、対象の認知は対象にたいするわたしたちの応接の仕方、さらには、対象の呈する状態（状態）の認知とも一体不可分である。この意味において、現与の生活形態＝行動形態がわたしたちの行なう対象認知のありようを一定限、拘束するとともに、他方また、対象認知のありようがわたしたちの生活形態を規定する所以ともなるのである。中間構文と呼ばれる表現形式は、ゆくりなくも、このことを示唆していると言うことができよう。椅子という対象を「椅子」として認知する営為は単なる一個人によっては到底能く為しうることがらではなく、対象の認知に際して、わたしたちは共同体的に形成された認知の態勢、すなわち、実践の態勢、を体現・発動する者となっている次第なのである。

かくして、わたしたちの認知には実践者「ひと」としての局面がつねに付帯する。この「ひと」を契機として、ようやく語用論（pragmatics）への視界が大きく切り拓かれうるところとなり、延いてはまた、レトリック（rhetoric）の領野にも遥かなる探究の射程は及ぶものとなるはずである。

注

*本稿は、熊本言語学研究会12月例会（2001年12月15日）における口頭発表を基礎とし、これを発展させたものである。例会の席上、僚友の村尾治彦氏、村上まどか女史を始め、出席の諸氏からは有益な批判を頂戴した。とくに村尾氏からは、その後、全篇にわたって懇ろなるご講評を忝なくした。氏の「蜂のように鋭い」批評がなければ、このようなかたちで本稿が成ることはなかったであろう。記して、深謝の意を表したい。また、校正の段階で吉村公宏氏からは、未見の文献のコピーとともに、小論への好意的なご返書を賜わった。寛容なる氏のご芳情に感恩の念を禁じえない。

1 van Oosten (1977) は、しかるべき理由から、この構文を the patient-subject construction と呼ぶが、Fellbaum (1985) などこれを踏襲している。以下、中

間構文の文例は Curme (1931)、溝口 (1989)、影山 (2001)、Dixon (1991)、吉村 (2001)、Fellbaum (1985) などより拝借。

2 溝口 (1989) でも、(7) - (9)、(30) のような場所ないしは時間をしめす修飾語句とともに、次の副詞表現をいずれも「主語の指示物の性質から派生しうる内容を表している」(p.61) と判断している：The piano plays *atrociously*. / Old people transplant *badly*. / These toys assemble *rapidly*. / Bread refrigerates *poorly*. / This car handles *stiffly*. 副詞の要素を随伴しないケースも見受けられるが、この場合にも主語（人工物）の「属性」があらわされる点は変わらない：This dress buttons. [Fagan (1988)] ちなみに、Rosta (1995) が ‘generic’ な意味をもたない文と見なす ‘Now the floor’s waxing nicely.’ / ‘The Eiffel Tower erected easily.’ など、これらが中間構文と解釈されるかぎり、主語の「属性」が表されていると考えられる。前者では、暫定的であるにせよ、床 (floor) の内在的な性質が記述され、後者では、たとえば、「(あのような構造をもつ建造物としての) エッフェル塔」というような意味の汎化が認められるのではないかと思う。また、‘The film is showing at the Scala.’ などは別構文と見るべきであろう。

3 中間構文に「総称化」が関与していることは、Fagan みずからも認めるように、Levin (1982) でも指摘されている。「総称化」は、いわゆる「総称文」(generic sentences) は言うまでもなく、慣用的表現 from head to start, mother and child, set up shop などの成立にも与かっていると考えられる。ちなみに、Wierzbicka (1996) では、W. みずから唱導する semantic metalanguage の根幹を成す原始的意味要素 (semantic primitives) の一つとして PEOPLE を想定しているほどである。

4 「クオリア (役割)」とは、吉村氏の用語法では、「名詞指示物が喚起する概念的知識、多くは慣習的・百科事典的知識として蓄積されたそのものについての知識を指す」(p.288)、という定義があたえられている。

5 別の箇所では、同じ趣旨から「主語名詞 (句) の指示対象において喚起される情報が述語動詞の表す行為によって前景化され」る、云々 (p.297) とも述べられている。

6 「共特定化」を引き起こす名詞句は主語NPにかぎられず、主語以外の名詞句 (たとえば、目的語NP) が関与する場合もある。また、a fast [typist/car/waltz] のような名詞句の中にも「共特定化」の作用が看取される (p.290)。

7 吉村氏は Pustejovsky (1991) にならってクオリア役割を4つの種類、すなわち、「構成的 constitutive クオリア」[質量、部分 (構成単位)]、「形式的 formal クオリア」[方向性、形、色彩、位置、かさ]、「目的的 telic クオリア」[目的、特定の行為を遂行するための内蔵機能]、「産出的 agentive クオリア」[作り手、人工物、自然物、因果連鎖] のそれぞれの下位クオリアに区分する (p.290)。

8 このような文 (This knife cuts easily.) を中右 (1991) は「中間構文」——氏はこれを「中間態」と呼ぶ——とは区別して、「自発態」と見なしておられる。その論拠の一つとして、このタイプの文が目的語をとる (This knife cuts *veal* easily.) ことを指摘される。このような見解があることを了承した上で、しかし、小論では先のタイプの事例——影山 (2001) の謂う「疑似中間構文」pseudo-middles——をも「中間構文」としてひとし並に取り扱う。

9 Faganの指摘する「総称化」に関して、吉村氏は「例 (10) [=‘The car drives well.’] の文意は、People, in general, can drive the car well とも、また、受動文 The car can be driven well (by people in general) とも異なる。つまり、(10) は車の属性について述べた文である。運転の下手な者や誰も運転したことのない車であっても成り立つ表現である。一般に誰もが上手に車を運転できること (People, in general, can drive the car well) を述べた表現ではない」(p.272) と述べて、これを一蹴しておられる。中間構文に Fagan が仮定する「潜在的動作主」(implicit agent) ——本稿で謂うところの「ひと」——を、このように ‘The car drives well.’ と ‘People, in general, can drive the car well.’ とが同義的 (synonymous) ではないという論拠でしりぞけることが妥当であるのは、両者の言い方の間に厳密に同義的なパラフレーズ関係が存在することが、議論の前提として、確立されている場合にかぎってのことである。しかし、氏の場合、論議に先だってそのような立証は何も行なわれていない。

また、The car handles smoothly when Sophy drives it. の文について、Iwata (1999) は Rosta (1995) を踏まえて、ここでは ‘specific’ な特定の個人が中間構文の隠的主語 (implicit argument) として働いている旨を述べる。しかし、後論のように、この場合、Sophy は車の「正しい」取り扱い方を知る者として単なる一個人以上の「ひと」=「理想化され (idealized) た存在」となっていることが銘記されなければならない。そして、それゆえにまた、この文は車の意図された「性能」をあらわす文となるのである。

10 とは言え、「椅子」としての所定の働きかけが適切に行なわれえない場合には、当然のことながら、当の対象は「椅子」として実践的に機能しえない。わたしたちの対象認知は、このように、しかるべき応接が成立するか否かに懸かっているものであり、この意味において対象の側からも一定限、規制されている。

11 ‘TO y’ が特定個人によって充当された、たとえば、‘Alvito is kind to me.’ のような文は、主語 (Alvito) に固有に具わる「性質」をあらわしているとは解釈されないのが通常であろう。主語の「本質」を述べるためには、たとえば、‘Alvito is kind to children.’ のように y を「汎化」(generalize) する必要がある。なお、第4節を参照。この点に関連して、吉村氏もまた私信の中で「属性」なるものがわたしたちと対象との実践的な関わりにおいて成立する旨を指摘した後、「属性の前景

化」は一定の反応が対象に恒常的に認められることを通して、反応様式の所有者として対象を捉え直す営為から生み出されるものである」云々と述べておられる。

12 ‘Mary {photographs/screens} well.’ の文に即して、吉村氏もまた「誰が写しても写りの良い写真（映像）ができるようなときに、はじめてその「写り（具合）」の責任を対象に帰することができる。そのものの属性として取り出すことが可能となるのである。」(p.298) 旨を指摘しておられる。しかし、これに続けて「ただし、あくまでもそのものの属性を前景化することに主眼があるのであって、これは「誰が写しても写りの良い写真（映像）が出来る」こと (People, in general, can {photograph/screen} Mary well) と同じではない」と論じて、「総称化」への足場を断ってしまわれる。ちなみに、「ひと one」は Books about *oneself* never read poorly. のようにときに顕在化する [Stroik (1992)]。

13 感覚動詞との連関は、This eats *crisp*./ This meat cuts so *tender*./ Sand-castles break *easy*./ Does Faulkner read *interesting*? [大沼 (1968)] のように述語動詞が形容詞をとまう事例を勘案すれば、いっそう顕かであろう。

14 強いて言えば、(37) のような言い方は、たとえば、商品を「買う」という行為が売り手を説得することを慣行的に必要としたり、あるいは、売り手との間に買い値を定めるための一定の手順が存在するような場合に、そうした所定の行動形態のもとで、「買い落とす」ことを容易ならしめる性質を当の車が具えていることを表わす言い方になるのではないかと推測される。O’Grady (1980) は、‘The low mortgage on those houses means that they buy easily.’ の文を容認可能としているが、この場合にも、mortgage という所定の「購入 buying」方式 (= 行動形態) にしたがうかぎりにおいて、「(家を) 買い取る」「入手する」といった一定の反応的事態を明確に想定 (予期) することができよう。谷口 (1995) のように「他動的事態」一般に妥当する認知モデルを中間構文に適用するアプローチでは、たとえば、(36) (37) の容認度の違いはそれぞれの表わす事態がこの認知モデルにどの程度、合致するか、この度合に対応するものとして説明される。しかし、この手法では、中間構文がそもそもなぜ主語の属性を表わす言い方となるのか、この点が説かれえない。

15 Rapoport (1999) は、‘These comic books sell (easily) all by themselves.’ のような文を挙げて、中間構文には、元来、「潜在的 (隠在的) 動作主 implicit agent」は存在せず、中間構文に動作主が感取されるか否かは述語動詞の種類によることを論じている。しかし、R. の議論には何よりも中間構文と通常の自動詞構文との区別がもとめられるように思う。上例は中間構文と同じ形式を採っているが、意味解釈の上では、自動詞構文と見るのが妥当であろう。R. はさらに ‘*These books sell for the average shopkeeper.’ の文をしめして、sell の場合には、中間構文はそもそも動作主性を欠く旨を述べるのであるが、たとえば、‘I’m sure these old books will sell if we try hard enough.’ などでは動作主体による「売る」という

「働きかけ」が強く感じられる。sell の場合には、敢えて「売る」という人為的な行為を行なわずとも、「商品それ自体がひとりでに店頭から飛ぶように（売れて）なくなる」というような事態認知がすでに確立しているとも考えられ、この意味では、たしかに自動詞と見なすことができる。とは言え、しかし、動作主による働きかけが潜在的に感取される中間構文の用法もまた可能であると思われる。この点は、R. が動作主の潜在を端から認めない ‘This kind of glass breaks easily.’ についても同断である。(Cf. The door *closes* easily; you just have to press down. / The door *closes* easily; it only takes a gust of air. [Fellbaum (1986)])

16 ここには、後述のように、単に身体的な様態のみならず、生理的な反応の仕方もふくまれる。

17 Jespersen [MEG III.16.8₁] は、俗語的なアメリカ語法 (‘Amr low coll.’) として、‘That doesn’t *listen* so bad. Sounds *racy*.’ のごとき例も挙げている。

18 通例、「経験者」(experienecer) と呼ばれる。「経験者」は一般に to をともなって顕示される: The rug feels rough *to me*. このような to 句には、断定文 (assertives) に付加される I think [feel, guess] などとも類比的に、発言を personalize する機能を看取することができよう。Cf. This onion slices easily *for me*, but not *for you*.

19 この見地に立って、いわゆる現在時制 (the present tense) の用法を討究することが可能である。それは、たとえば、Langacker (2001) の採るアプローチやその主張するところとは大いに異なるものとなるであろう。

20 周知のように、この all は「個体レベル」の形容詞とは共起しない: *He’s *all intelligent*. / *The man is *all old*. / *I like to look at Miss America because she is *all beautiful*. 加えて、(45) のように、get もまた essence/accident の示差に係わる: *As she grew up, Mary *got beautiful*. [Bolinger (1973)]

21 廣松 (1982)、p.273.

参考文献

- Bolinger, D.L. (1973), ‘Essence and accident: English analogs of Hispanic *ser-estar*.’ B.B.Kachru et al. (eds.), *Issues in Linguistics: Papers in Honor of Henry and Renée Kahane*, 58-69. University of Illinois.
- Curme, G.O. (1931), *Syntax*. D.C.Heath and Company/Maruzen.
- Dixon, R.M.W. (1991), *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Clarendon Press. Oxford.
- Fagan, S.M.B. (1988), ‘The English Middle.’ *Linguistic Inquiry* 19, 181-203.

- Fellbaum, C. (1985), 'Adverbs in agentless actives and passives.' *CLS* 21, part 2, 21 - 31.
- Fellbaum, C. (1986), *On the Middle Construction in English*. IULC.
- 廣松 渉 (1982)、『存在と意味——事的世界観の定礎——』岩波書店。
- Iwata, S. (1999), 'On the status of an implicit argument in middles.' *Journal of Linguistics* 35, 527 - 553.
- Jespersen, O. (1927), *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part III. George Allen & Unwin.
- 影山 太郎 (編) (2001)、『動詞の意味と構文』大修館書店。
- Keyser, S.J. & T.Roeper (1984), 'On the middle and ergative constructions in English.' *Linguistic Inquiry* 15, 381 - 416.
- Langacker, R.W. (2001), 'The English present tense.' *English Language and Linguistics* 5, 251 - 272.
- Levin, L.S. (1982), 'Sluicing: a lexical interpretation procedure.' J.Bresnan (ed.), *The Mental Representation of Grammatical Relations*, 590 - 654. MIT Press.
- 溝口 健司 (1989)、「中間構文の responsibility」大谷女子大学 英語英文学研究 第16号、57 - 72。
- 中右 実 (1991)、「中間態と自発態」日本語学 10、52 - 64。
- O'Grady, W.D. (1980), 'The derived intransitive construction in English.' *Lingua* 52, 57 - 72.
- 大沼 雅彦 (1968)、『性質・状態の言い方／比較表現』研究社。
- Pustejovsky, J. (1991), 'The generative lexicon.' *Computational Linguistics* 17, 409 - 441.
- Rapoport, T.R. (1999), 'The English Middle and agentivity.' *Linguistic Inquiry* 30, 147 - 155.
- Rosta, A. (1995), "'How does this sentence interpret?' The semantics of English mediopassives.' B. Aarts & C.F.Meyer (eds.), *The Verb in Contemporary English*, 123 - 144. CUP.
- Stroik, T. (1992), 'Middles and movement.' *Linguistic Inquiry* 23, 127 - 137.
- 谷口一美 (1995)、「中間構文の認知的分析」*Osaka Literary Review* 33, 1 - 16.
- van Oosten, J.H. (1977), 'Subjects and agenthood in English.' *CLS* 13, 459 - 471.
- Wierzbicka, A. (1996), *Semantics: Primes and Universals*. OUP.
- 吉村 公宏 (2001)、「人工物主語——クオリア知識と中間表現——」山梨 正明他 (編)『認知言語学論考』No.1、257 - 317。ひつじ書房。